



評論・随筆

# 福田礼輔

ふくだ れいすけ

周南市・下関市・山口市  
(1928～2016)



## 【著作】

『やまぐち菜時記』(昭和58・サンデー山口)  
『続・やまぐち菜時記』(昭和62・サンデー山口)  
『札の辻・鯉』の山口春秋』(平成22・文藝春秋)

## 味の引き立役

山口盆地を時雨が通り過ぎる季節。西風颯から東風颯への山稜を木戸山峠へとすぎゆくかと思えば、双子山から鴻ノ峯へ、さらに姫山へと盆地を走りぬけてゆくこの気まぐれな細い雨足は、木々をぬらし、草々をしめらせ、そして紅に黄に染めあげる染色家でもある。

先日、山陰の浜田から、中国山地の村里を縫って中国縦貫道に至り、山口にたどりつくというバス旅行をしたのだが、中国山地はいま目を見張る見事な紅葉の時期で、夕映えの山頂から夕暮せまる山麓にかけての壮大な紅葉のパノラマに、しばし息を飲む思いであった。

ナラ、ブナなどの紅葉の中にあってイタヤカエデの黄葉のすばらしさはひとつのアクセントであり、ヤマモミジ、ハゼ、ナナカマドの燃えるような美しさは旅心をたく晩秋の色彩である。

また、山地の農家の庭先には、鈴なりの柚子が黄色く光っていた。

この小旅行で泊った宿の膳にも柚子釜が出た。晩秋から初冬にかけての味覚と香りに柚子は欠かすことができない。

秋の葉味として、ミヨウガ、ダイダイ、スダチ、カボス、ユズなどがあるが、とくにユズはサンシヨウと共に日本の二大香料というほどその香りがもてはやされている。

むかしから、タケノコに木の芽(サンシヨウ)、アユにタデ、マツタケにユズ、カモにネギと、味の主役と介添が決まっている。いずれも、その季節の味と香りの演出者である。

ユズは秋のものだが、柚子湯ともなると冬である。古来、冬至には柚子風呂を立てて入る。

白々と女沈める  
柚子湯かな

草城

(58・11・22)  
『続・やまぐち菜時記』より)



## 福田礼輔 年譜

|             |     |
|-------------|-----|
| 昭和3(一九二八年)  | 一三歳 |
| 昭和16(一九四二年) | 一七歳 |
| 昭和20(一九四五年) | 二〇歳 |
| 昭和23(一九四八年) | 二三歳 |
| 昭和25(一九五〇年) | 二七歳 |
| 昭和30(一九五五年) | 二八歳 |
| 昭和31(一九五六年) | 二八歳 |
| 昭和37(一九六二年) | 三四歳 |
| 昭和44(一九六九年) | 四一歳 |
| 昭和51(一九七六年) | 四八歳 |
| 昭和53(一九七八年) | 五〇歳 |
| 昭和55(一九八〇年) | 五二歳 |
| 昭和56(一九八二年) | 五三歳 |
| 昭和58(一九八三年) | 五五歳 |
| 昭和62(一九八七年) | 五九歳 |
| 平成6(一九九四年)  | 六六歳 |
| 平成7(一九九五年)  | 六七歳 |
| 平成9(一九九七年)  | 六九歳 |
| 平成12(二〇〇〇年) | 七二歳 |
| 平成15(二〇〇三年) | 七五歳 |
| 平成16(二〇〇四年) | 七六歳 |
| 平成22(二〇一〇年) | 八二歳 |
| 平成28(二〇一六年) | 八八歳 |

5月3日、山口県熊毛郡八代(現・周南市)に生まれる。

八代尋常高等小学校卒業。

山口県立徳山中学校卒業。

山口経済専門学校(現・山口大学経済学部)卒業 八代中学校の教員となる。

東京の日本出版配給株式会社に入社。文壇の社交場であった銀座「セレナーデ」池袋「おもろ」にて草野心平、山之口獏と親交を結ぶ。

同人雑誌『裸線』を出版。

山口放送株式会社に入社。経理職、営業職を経た後、報道記者として取材活動に入る。

山口放送下関支社に赴任。古川薫や開作惇らと親交を結び、同人誌『午後』に参加。毎日新聞、日本経済新聞に釣り記事を連載。

山口放送山口支社長に就任。下関市出身の大相撲力士・魁傑と幕下時代から親交を深め、入幕から大関昇進、放駒部屋設立まで後援活動を行う。

山口放送取締役・報道局長に就任。

山口放送専務取締役・報道局長に就任。

『やまぐち菜時記』をサンデー山口から出版。

山口放送専務取締役・報道制作本部長に就任。『続・やまぐち菜時記』をサンデー山口から出版。

サンデー山口相談役就任。

サンデー山口に「つむじ風」寄稿開始。山口放送専務取締役退任。

NHK大河ドラマ「毛利元就」脚本家、内館牧子の取材に協力。

サンデー山口に「札ノ辻・21」寄稿開始(計813回連載)。瑠璃光寺の司馬遼太郎文学碑建立に協力。

サンデー山口に「稜線」寄稿開始。

NPO法人「歴史の町山口を甦らせる会」理事長に就任。移築復元された山口市菜香亭の館長に就任。

『札の辻・鯉』の山口春秋』を文藝春秋から出版。

12月24日、山口市にて永眠。

(提供・福田一平)

福田礼(禮)輔は、子どものころから書くことが好きで、学生時代は新聞部に籍を置いた。その後、東京の出版取扱会社に就職。若くして文壇バーにも出入りし、草野心平や山之口獏らと親交を結んだ。

二十八歳の時、家庭の事情で山口に戻ることとなり、昭和三十一年(一九五六)、山口放送の開局時に同社へ入社。ジャーナリストとしての歩みをスタートさせた。昭和三十七年(一九六二)からは下関支社で勤務。水揚げ高西日本一を誇り、日韓問題等で取材の「前線基地」だった昭和三十年代の下関で、全国から集まった記者たちとしてのぎを削った。その中で、当時みなと山口合同新聞の記者だった直木賞作家の古川薫や、後にサンデー山口を旗揚げする開作惇(当時大日本水産会)らとの友情もはぐくまれた。

昭和四十四年(一九六九)、山口放送山口支社長に就任し、生活の拠点が山口市に。それから遅れること三年、防長新聞社に移った開作も山口市に転居。再び親しく交わるようになった。だが、防長新聞社は昭和五十三年(一九七八)四月、その九十八年にわたる歴史に幕を閉じ、開作は同年八月、山口市域に無料配布する地域情報紙・サンデー山口を創刊させた。

開作に請われ福田は、山口放送の取締役という要職にありながら、同紙創刊八号から「やまぐち飲んで食って」の連載を開始。それを皮切りに、同紙を舞台にさまざまな文章を世に出し続けた。中でも、昭和五十五年(一九八〇)から平成十一年(一九九九)まで一千回にわたり毎週連載した「やまぐち菜時記」はその代表格。ふるさと山口の四季と味覚を、繊細な視点と軽快なタッチで描いたエッセーはたちまち人気を呼び、二度にわたり書籍化もされた。また、平成十二年(二〇〇〇)から体調を崩す平成二十八年(二〇一六)七月まで続けた「札の辻・21」も、八百十三回にわたる長期連載で、これも「札の辻・鯉」の山口春秋」として出版された。

その見識の広さと人望の厚さから、山口市菜香亭の初代館長を務めるなど、「山口の文化人」としても活躍した福田。ジャーナリストであり、執筆家であり、文化人という、地域にとって、稀有で貴重な存在だった。

(文・開作真人)



著書



内館牧子との宴席